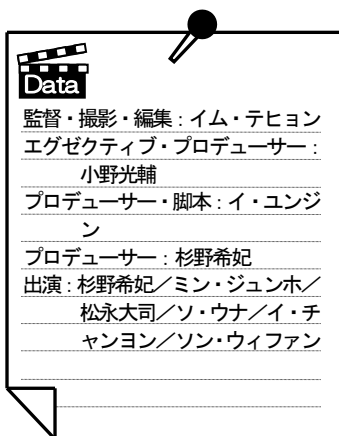




👁️👁️ みどころ

映画祭のため来阪した韓国のイム・テヒョン監督が、偶然出会った杉野希妃を起用し、たった1日で本作を完成。その日2011年3月12日は東日本大震災の翌日であり、杉野の27歳の誕生日だ。

どこまでがフィクションでどこからがドキュメンタリー？どこまでがセリフでどこからがアドリブ？タイトルもケツタイなら、ストーリーのケツタイさも大阪的！橋下ブームと同様、こりゃ大阪でヒットさせてから全国制覇へ・・・？

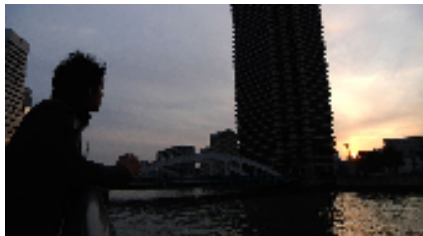
———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ————

■□■この女優に注目！このチャレンジに拍手！■□■

『歓待』（10年）ですごい才能を見せつけ（『シネマルーム27』160頁参照）、「おおさかシネマフェスティバル2012」で見事新人女優賞を受賞した杉野希妃は、近時私が最も注目している若手の美人女優。そんな彼女とある日プライベートな場で現在の映画界の状況を語り合い、また彼女の映画づくりへの姿勢、情熱を聞くことができたのは私にとって大きな喜びだった。『マジック&ロス』（10年）はそんな杉野希妃が、『息もできな



©'Film Bee' all rights reserved.



©'Film Bee' all rights reserved.

い』（08年）『シネマルーム24』（157頁参照）のヤン・イクチュンとキム・コッピと共演した摩訶不思議な映画だったが、さて本作は？

『大阪のうさぎたち』は、大阪アジア映画祭2011コンペティション部門に正式招待され、ゲストとして参加していた韓国イム・テヒョン監督が大阪でSF映画を撮る予定になっていたところ、それに参加すべき女優が3・11東日本大震災のため来られなくなったため、急遽杉野希妃が主演女優として参加することになった、という曰くつきの映画。しかも、本作は丸1日で撮影されたうえ、撮影された2011年3月12日は東日本大震災の翌日にあたるとともに杉野の27歳の誕生日というから恐れ入る。映画の中には杉野の誕生日パーティーのシーンも登場するが、これはプライベートな撮影の一部をそのまま流用（？）したものだから、本作は一体どこまでがフィクションで、どこからがドキュメンタリー？大阪のまちやホテルの中で交わされる、恋人を失ってやってきた女（杉野）と韓国からやってきた男（ミン・ジュンホ）の会話もどこまでが脚本でどこからがアドリブかよくわからない。そんな思いつきの映画（？）に、即決で（？）参加した杉野のチャレンジ精神に拍手。

■懐中電灯下での語らいは？そのリアリズムは？■

本作には、世界の人々が次々と死んでいく中で杉野と松永大司扮する別れた恋人が互いに懐中電灯を持つ光の中だけで、語り合う風景が登場する。こんな状況下の2人をカメラが撮影すれば、誰が撮ってもキレイに撮れないのは当然だが、逆にそんな明かりの中でアップされると、杉野の表情は意外にキレイに浮かびあがるから不思議なものだ。

最近の邦画の画質はとにかくキレイだが、逆にノッペラボウで変化に乏しい感が強いが、ほとんどお金をかけないこんな撮影でも、世界が滅亡しつつある中で恋人同士の語らいのリアリズム（？）はひしひしと・・・。



© Film Bee' all rights reserved.



© Film Bee' all rights reserved.

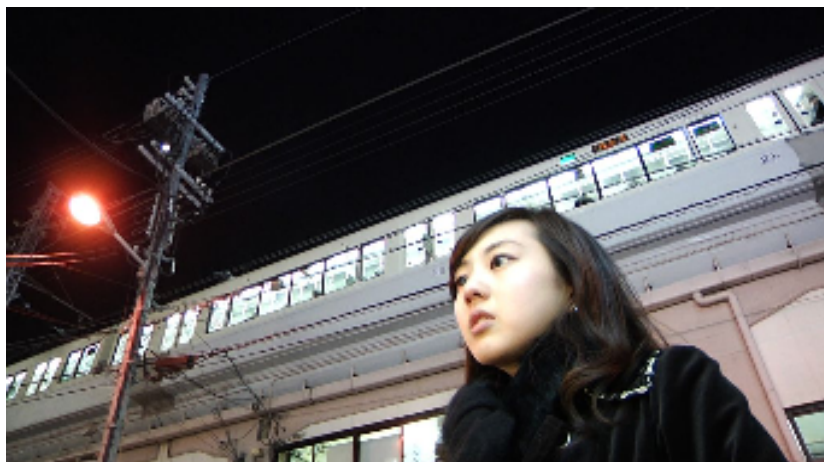
■会話のきっかけは、食べ物話題から・・・■

韓国から大阪を目指してやってきた男と、恋人を失って大阪にやってきた女が出会うのは全くの偶然だが、その女が韓国語をしゃべれるという設定はいくら大阪が舞台でもホント無理筋・・・。それはともかく、はじめて知り合った男女の会話が弾むのは大阪らしく食べ物話題からだ。プレスシートによれば、本作のポイントは「人類最後の日、ホルモンが食べたい！不思議な街。不思議な夜。不思議な会話。その日、OSAKAで出会った

ふたり。」とされているが、実際のセリフで登場するのはホルモンではなく、もつ煮込み。ホルモンでももつ煮込みでも韓国通の人ならOKだろうが、死ぬ直前に1つだけ食べたいものがあるとなれば、それがもつ煮込みとはいかに大阪的！

他方、「不思議な夜」と「不思議な会話」が実現するのは2人がホテル（ラブホテル？）に入ってからだ。1970年代の日活ロマンポルノなら当然ここからベッドシーンになるわけだが、本作では人類滅亡への残り時間が刻まれる中、ここで交わされる2人の不思議な会話がポイントとなる。淡々とした会話が多いが、途中感情が激してきた女による激しいセリフもポンポンと放たれるので、これが台本どおりなのか、アドリブなのかの判定も含めて、その「不思議感」を満喫したい。

■大阪人必見！これぞ「大阪の映画」！■



©'Film Bee' all rights reserved.

最近のご当地映画が大はやりだが、わずか1日で大阪各地を撮影した本作には、大阪城や大阪城公園をはじめ、南海なんば駅構内（ラピートなど）や京阪中之島駅周辺などを歩く2人の姿が登場する。また、これは地元の人しかわからないかもしれないが、JR福島駅と駅近くの居酒屋等々も登場するから、大阪人は必見！

私はコラムニストの武部好伸氏と試写会でよく一緒するが、彼は『ぜんぶ大阪の映画やねん』（平凡社）という面白い本を出版している。大阪の映画といえば、『王将』（48年、62年、73年）、『心中天網島』（69年）、『泥の河』（81年）、『道頓堀川』（82年）、『白い巨塔』（66年）等の名作から、『「エロ事師たち」より人類学入門』（66年）、『難波金融伝 ミナミの帝王』シリーズなどのコテコテ大阪もの（？）まで、興味深いものがたくさんある。同書は2000年の出版だから、改訂版が出るなら、新たに本作が追加されるべきだろう。昔から大阪は韓国と相性がいいうえ、本作は美人女優、杉野希妃が主演かつプロデュースした映画だから、韓国のイム・テヒョン監督の作品であっても、大阪人には十分受け入れられるはずだ。

2012（平成24）年5月23日記